

第一章 薫と匂宮の物語 女二の宮や六の君との結婚話

[第一段 藤壺女御と女二の宮]

*そのころ(ところで当時)、藤壺と聞こゆるは(藤壺と申し上げた御方は)、*故左大臣殿の女御になむおはしける(故左大臣殿の娘御でいらっしやいました)。 *「そのころ」は注に<漠然とした過去>をさし、物語を語り起こす常套句。「橋姫」巻にもある。この左大臣は系図不詳の人。その娘の三の君。今上帝(朱雀院の第一皇子)が東宮時代に入内し、藤壺女御と呼称された、という紹介。同じ後宮には明石中宮がいる。「なむ一ける」係結びの呼応。>とある。が、「漠然とした過去」というのは随分不親切な注釈だ。この物語は昔話の体を取っているのですべてが「漠然とした過去」の言い方に違いなく、此处では早蕨巻末を受けるかどうか問題なのだから、特にその時点や場面を受ける話題ではないが、「その」の同時性と「ころ」の普遍性からして、早蕨巻末と同時期の別の話題、とは即ち、宇治姫の二条院入りがあった頃の話として<大体その当時のこと>くらい言い方だ、と説明されるべきだろう。むしろ、もし、そういう話運びでないなら、また巻序が問題になるという煩わしさだ。しかし、巻頭の渋谷概説には「この帖は、薫君の中、大納言時代二十四歳夏から二十六歳夏四月頃までの物語」とあり、この「そのころ」を早蕨巻の前年と解しているように見える。こうした専門家の、しかし曖昧な、指摘があると混乱するが、私は一先ずは、本文のこの「そのころ」を、この巻序を信じて(是も問題があるようなので、素人読者は本当に辛い)、素直に早蕨巻と同年の話として読んで見たい。 *「こさだいじんの」は「系図不詳の人」とあり、これまでに何も詳しく触れられていないし何の明示もないようだが、この人は確か竹河巻五章一段に「左大臣亡せたまひて」と語られていた人で、以前からその存在は知らされて来ていて、恐らくは朱雀院の母方勢力に属する藤原氏ではあるのだろう。

まだ春宮と聞こえさせし時(帝がまだ東宮と申しあそばした時に)、人より先に参りたまひにし(一番先に入内なさった人なので)、睦ましくあはれなる方の御思ひは、ことにものしたまふめれど(親密で愛しい思いも帝は格別寄せていらっしやったようだが)、*そのしるしと見ゆるふしもなくて年経たまふに(御懐妊の兆候も無いままに年が経つ内に)、中宮には、宮たちさへあまた、こころ大人び*たまふめるに(中宮の方には親王さえ何人も多く成人なさっておいでだというのに)、*さやうのこともすくなくて(そういう賑わいも少なくて)、ただ女宮一所をぞ持ちたてまつりたまへりける(ただ内親王のお一人を設け申しいらっしやいました)。 *「そのしるしと見ゆるふし」は注に<立後の沙汰もなくて、という意。>とある。が、政治情勢としては六条院光君の圧倒的優位の前に、明石中宮以外の立後の目は無かったかと思う。「しるし」は<効果>であり、御寵愛の効果といえは懐妊>と取るのが自然だ。 *「たまふめる」は注に<ここの推量の助動詞「めり」も語り手の主観的推量の意。>とある。上の帝の「ものしたまふめれど」と同様に、ということらしい。が、是は高貴な人を直接的に見聞きした表現にするのが憚られる場合の謙譲の曖昧表現ということでは上文の場合と同じだろうが、皇子達が成人しているのは客観的事実なので、それを<らしい>とか<ようだ>という現代語の推量表現に言い換えるのは不自然だ。こういう「めり」はぼかした婉曲表現で対象を雲上に置く二重敬語だから、「たまふめり」で<いらっしやっしておいでになる>という言い方だろう。 *「さやうのこと」は<出産>ではなく、「大人ぶ(子が成長する)」ことの賑わいと喜び、と取りたい。拡大解釈気味だが、そうで無いと全体の文意が納まらない。

わがいと口惜しく(藤壺女御は自分の実に無念にも)、人におされたまつりぬる宿世、嘆かしくおぼゆる代はりに(人に圧倒され申した人生が嘆かわしく思える代わりに)、「この宮をだに、いかで行く末の心も慰むばかりにて見たてまつらむ(せめて我が娘宮だけは、何とか将来が安心

できる形に結婚させ申したい」と、かしづききこえたまふことおろかならず(と大事に御育て申しなさること余念ありません)。御容貌もいとをかしくおはすれば(姫宮は御器量もとても美しくいらっしやるので)、帝もらうたきものに思ひきこえさせたまへり(帝も可愛い子だと思ひ申しあそばしていました)。

女一の宮を、世にたぐひなきものにかしづききこえさせたまふに(帝は中宮腹の女一の宮を最上の格式で大事に遇し申しあそばしていたので)、おほかたの世のおぼえこそ及ぶべうもあらね(皇女としての儀式ばった立派さという公式での評判は及ぶべくもないが)、うちうちの御ありさまは、をさをさ劣らず(内々での御評判は、この藤壺女御腹の女宮も少しも引けを取らず)、父大臣の御勢ひ、厳しかりし名残、いたく衰へねば(祖父大臣の御権勢華やかなりし頃の影響力もひどく衰えてはいなかった)、ことに心もとなきことなどなくて(とくに暮らし向きに心許無い事も無くて)、さぶらふ人びとのなり姿よりはじめ、たゆみなく、時々につけつつ、調へ好み、今めかしくゆゑゆゑしきさまにもてなしたまへり(仕える女房たちの装束を初め、抜かりなく時候に応じて新調して、趣向も新しく品格ある姿にいらっしやいました)。

[第二段 藤壺女御の死去と女二の宮の将来]

*十四になりたまふ年(この姫宮が十四にお成りになるこの年に)、御裳着せたてまつりたまはむとて(御裳着を執り行い申しなさろうという事で)、*春よりうち始めて(春から準備に取り掛かり)、異事なく思し急ぎて(順調に事物を取り揃えて)、何事もなべてならぬさまにと思しまうく(何事も普通とは違う皇女の格式を持った形でと取り計らいなさいます)。 *「じふしになりたまふとし」は注に<女二宮、十四歳の年に裳着の儀式を予定。主語は母藤壺女御。>とある。「裳着」は後年、結婚に先立つ儀式のようになったような説明もあるが、此处では結婚話を前提にしてはいない、少なくとも決まっていなくて、髪型や服装などを子供のものから大人のものに変える区切り、という本来の意味合いなのだろう。確かに儀式の政略性は重要で、例えば玉鬘の裳着場面は印象的だったが、基本的には「裳着」は成人式で、列席の諸侯に姫のお披露目、と言っても実際に姫の姿を見ることは許されないのが評判の伝聞だが、をすることに主眼があったかと思う。即ち、この宮の何処かへの輿入れを帝が考えたという文意なのだろう。ところで、三の宮の匂宮がこの年で26歳である事からして、女一の宮はより年長かと思われるが、帝には女宮が少なく、女二の宮が今年で14歳とは、ずいぶん若い妹に当たる。尤も、腹違いとなれば別の場所で育つので、本人たちに姉妹の意識は無いのかも知れない。 *「はるより」とあるが、「裳着」は例えば<秋>と季節が決まっているわけでもなく、吉日であれば良いのだから、この基点を示す「より」は具体的にどれくらい前以ての事なのか、という点に於いては意味不明だ。が、この以前から何かが行われていた、または何らかの状態だった、という事情説明を示すこの格助詞は、これから何かが起こる前提として、ある作用力の一定の溜めを場を感じさせる効果はある。

いにしへより伝はりたりける宝物ども(実家に昔から伝わる宝物類を)、この折にこそはと、探し出でつつ、いみじく営みたまふに(良い機会だと探し出しては熱心に支度なさっていたが)、女御、*夏ごろ、もののけにわづらひたまひて、いとはかなく亡せたまひぬ(藤壺女御は夏の時分に妖気に当たりなされてあつけなく亡くなってしまいました)。 *「なつごろ」は注に<夏と病氣。この物語における主題と季節の類同的発想。>とある。「もののけにわづらひたまふ」は、およそ<熱にうなされる>で、恐らくは熱中症だろう。

言ふかひなく口惜しきことを、内裏にも思し嘆く(言いようもなく残念なことで帝におかれても御嘆きなさいます)。心ばへ情け情けしく、なつかしきところおはしつる御方なれば、殿上人どもも(思い遣りがあつて親しみを持てる場所がある御方でいらっしゃったので、管理職の役人たちも)、「こよなくさうざうしかるべきわざかな(非常に寂しいことです)」と、惜しみきこゆ(と惜しみ申します)。おほかたさるまじき際の女官などまで(多くの実際には女御に近付き申せる身分ではない低位の女官などまで)、しのびきこえぬはなし(お人柄を偲んで泣き申さぬ者はいません)。

宮は、まして若き御心地に(姫宮はまして幼心に)、心細く悲しく思し入りたるを、聞こし召して(心細く悲しんでいらっしゃるのを、帝はお聞きあそばして)、心苦しくあはれに思し召さるれば(心配で不憫に思し召されて)、*御四十九日過ぐる*ままに、忍びて参らせたまつらせたまへり(母女御の四十九日の忌明けと同時に、表立った儀式仕立てにはせずに内々に参内させ申ささいました)。*「おおんしじふくにちすぐ」は藤壺女御の四十九日の忌明けだろうが、「夏ごろ」が五月とすれば、忌明けは七月半ばあたりで、季節は秋だ。*「まま」は<事物の一定状態そのもの=何も変化がない状態>で、「ままに」にくその事に続いて=その直後に>。注には<副詞「ままに」、と同時に、とすぐにの意。>とある。「過ぐるままに」にくむなく時が早く過ぎて、秋も深まるままに>という響きはある、かと思う。

日々に、渡らせたまひつつ見たてまつらせたまふ(帝は毎日、姫宮の御部屋に御見えになって御機嫌を伺い申しあそばします)。黒き御衣にやつれておはするさま(黒い喪服姿でやつれていらっしゃる姫宮の姿は)、いとどらうたげにあてなるけしまさりたまへり(いっそういたわしく気品ある気配が増していらっしゃいました)。心ざまもいとよく大人びたまひて(御性格もとても落ち着いていらっしゃって)、母女御よりも今すこしづしやかに、重りかなるところはまさりたまへるを(母女御よりも今少しどっしりと重々しくものに動じない様子が勝っていらっしゃるのを)、うしろやすくは見たてまつらせたまへど(帝は一安心なさるが)、まことには(実情としては)、御母方とても、後見と頼ませたまふべき、*叔父などやうのはかばかしき人もなし(母方には兄弟縁者に後見に頼れるほどの有力な人もいません)。わづかに*大蔵卿、修理大夫などいふは、女御にも異腹なりける(僅かに大蔵省長官や宮大工方職長などがいたが、女御とは腹違いなのでした)。*「叔父(をち)」は注に<女御の兄弟。>とある。母女御は故左大臣が入内させたのだから正妻腹なのだろうが、妾腹の兄弟はそれらの母の実家で育つので、故左大臣殿は父親として世話を焼くだろうが、別腹の兄弟は実の兄弟としての睦みは実体も実感もないのだろう。*「大蔵卿(おほくらきやう)」は<正四位下相当官>、「修理大夫(すりのかみ)」は<従四位下相当官>、と注にある。高官だが重鎮ではない。大臣の正妻腹の子なら中納言や大納言を襲うのではないか。

ことに世のおぼえ重りかにもあらず(特に政治力があると認められてもおらず)、やむごとくならぬ人びとを頼もし人にておはせむに(王族でもない縁者を姫宮は援助者に頼っていらっしゃったので)、「女は心苦しきこと多かりぬべきこそいとほしけれ(このままでは女宮は女中体制も十分に賄えず、肩身の狭い思いをすることが多そうなのが不憫だ)」など、御心一つなるやうに思し扱ふも(などと帝が御自分一人で見守らなければならぬと思ひ御世話なさるといふのも)、やすからざりけり(容易ならざる事でした)。

[第三段 帝、女二の宮を薫に降嫁させようと考える]

御前の*菊移ろひ果てて盛りなるころ(庭先の菊の花が紫に変色し果てて見事な初冬の頃)、空のけしきのあはれにうちしぐるるにも(雲行きも涙がちに一雨降り始めるにつけても)、まづこの御方に渡らせたまひて(帝は先ずこの姫宮の御部屋にお向かいあそばして)、昔のことなど聞こえさせたまふに(故母女御の昔話を聞かせなされると)、御いらへなども、おほどかなるものから、いはけなからずうち聞こえさせたまふを、うつくしく思ひきこえさせたまふ(姫の御返事もゆっくりではあるが、しっかりと理解して応じ申しなさるのを、出来の良い娘と思い申し上げなさいませ)。 *「菊移ろひ果つ」は、白い小菊が紫に変色すること、を言うらしい。菊の盛り、と言え、九月九日の重陽の節句に菊花の宴が催されたらしいので、今の太陽暦ではざっとひと月遅れの十月半ばあたりだが、十一月になると霜焼けで白から紫に変色する菊の花が多くあって、此处でいう「盛り」はその頃を指すようだ。で、新暦十一月は旧暦の十月とは神無月で、季節は冬になっているのだろう。

かやうなる御さまを見知りぬべからむ人の(こうした姫宮の御成長ぶりを理解できる人が)、もてはやしきこえむも、などかはあらむ(娶って大事に世話申すというのも、どうして無くて良いものか、と帝は)、*朱雀院の姫宮を、六条の院に譲りきこえたまひし折の定めどもなど、思し召し出づるに(父朱雀院が妹宮を六条院光君に任せ申しなさった時の決定に至る経緯などを思い出しなされると)、 *「朱雀院の姫宮を六条の院に譲りきこえたまひし折の定め」は注に<朱雀院は帝の父、女三宮は帝の異母兄妹、薫の母。>とある。「定め」は「御」が無いので、朱雀院の<御決定>や入道宮の<御運命>というよりは、訳文にあるように<評定=決定に至る経緯>と読んで置く。

「しばしは(我が妹宮も六条院に嫁いだ当初は)、いでや、飽かずもあるかな(いや、光君は紫の上を大事になさって、十分に満足できる結婚ではない)。さらでもおはしなまし(独身でいらっしゃる方が良かった)、と聞こゆることどもありしかど(という風評もあったものだが)、源中納言の、人よりことなるありさまにて(子息の源中納言が人一倍優れた人柄で)、かくよろづを後見たてまつるにこそ(三条宮邸の建て直しのように万事お世話申し上げているからこそ)、そのかみの御おぼえ衰へず(昔の御威光も衰えず)、やむごとなきさまにてはながらへたまふめれ(尊厳のある暮らしを続けていらっしゃるわけだ)。さらずは(六条院への降嫁が無かったら)、御心より外なる事どもも出で来て(入道宮の御気持ちは別に女房たちの手引きなどによって、つまらない男に縁付いて)、おのづから人に軽められたまふこともやあらまし(その結果、世間から軽んじられなさる事になったかも知れない)」

など思し続けて(など考え続けなさり)、ともかくも、御覧ずる世にや思ひ定めまし(とにかく御自分の治世に姫宮の婿を決めなければ)、と思し寄るには(と思ひ至りなされば)、やがて、そのついでのままに(そのまま、その話の筋のままに)、この中納言より他に、よろしかるべき人、またなかりけり(当の薫中納言以外に適当な候補はいなかったのです)。

「*宮たちの御かたはらにさし並べたらむに(源中納言なら妹宮腹という血筋からしても、親王たちの横に並べてみても)、何事もめざましくはあらじを(何も見劣りすることはない)。もとより思ふ人持たりて(あの者は結婚に不熱心で、もともと意中の人居て)、聞きにくきこと*うちまづまじくはた、あめるを(思わしくない他の縁談が出て来かねない心配というものは、どうも

無いのだが)、つひにはさやうのことなくてしもえあらし(最後まで結婚せず終いということもないだろう)。さらぬ先に(他の結婚が決まる前に)、さもやほのめかしてまし(姫宮を打診してみようか) *「宮たちのおおんかたはら」はく親王たちの横に置いて見比べる>だろう。が、取って付けたような言い回しに聞こえて、帝が是を言う意図は良く分からないが、薫君が妹宮腹の子だという王家筋の血筋を引いている、という意味に解して置く。 *「うちまずまじく」は、不意性を示す接頭語「打ち」+動詞「混ず(混ぜ出る)」の終止形+不適當を示す助動詞「まじ」の連用中止形名詞で、何か<不意に現出しかねないことの無さ>。薫君が結婚に消極的だということを言っているようだが、「まじくあめる(なさそうだ)」の中に強調の副詞「はた」が挿入される文型は現代語には継がれていないので、妙に分かり難い。

など、折々思し召しけり(など帝は時々お考えあそばしては)、*御碁など打たせたまふ(姫宮相手に碁打ちなどをしなさいます)。 *「おおんごなど~」は、渋谷校訂では此処の文から[第四段]に段換えしてある。即ち、上文の「折々思し召しけり」で句点とする校訂となっている。が、そうであれば、現代語文ならくさてそこで>とかくそんなある日>くらいの前置句で場面説明があって然るべき構文であり、古文でもこんな唐突な段頭の語り出しは変だ。むしろ、この原文で文意を素直に読み進むには、「折々思し召しけり」では読点として当文に続けなければ、あまりに稚拙な場面転換だ。よって、私は当文までを[第三段]に組み入れて置く。なお、この帝の碁打ちの<相手が姫宮であること>は省語されているが、几帳などの物越しで隠されることの無い姫宮の姿が父帝の目を通して読者に想起される、という非常に重要な情緒だ。

[第四段 帝、女二の宮や薫と碁を打つ]

*暮れゆくままに(そんなある日に帝は、日暮れと共に)、時雨をかしきほどに(時雨空が風情ある時に)、*花の色も夕映えしたるを御覧じて、人召して(紫の菊の色も赤く夕映えしているのを御覧になると、侍従舎人の蔵人を呼び寄せなさって)、 *「暮れゆくままに」からは具体的な場面描写が始まるようなので、此処からの段換えには従いたい。で、そうすると、現代語文としては此処から独立の文構成となる事を示す為、場面説明の前置句を補語すべきかと思われる。 *「花の色も夕映えしたる」は二藍の赤紫により赤味が差して、薫中納言の色気を感じさせる比喻なのだろうか。私には分からないが、当時の読者ならこの言い方で具体的な意味合いをはっきり感じ取った、のではないかと思わせるような書き方に見える。

「ただ今、殿上には誰れ誰れか(今、昇殿しているのは誰か)」

と問はせたまふに(とお尋ねになると)、

「*中務親王(なかつかさのみこ)、*上野親王(かうづけのみこ)、中納言源朝臣(ちゅうなごんみなもとのあそん)さぶらふ(が居ります)」 *注にはく以下「さぶらふ」まで、控の人の詞。中務親王、「東屋」巻の中務宮と同一人。明石中宮腹の親王か(細流抄)。上野親王は、系図不詳の親王。中納言源朝臣が薫の正式呼称。>とある。「中務親王」は中務省(なかつかさしゃう、なかのまつりごとのつかさ)の名譽長官で中務卿宮(なかつかさきやうのみや)を近しく呼称する御所用語なのだろう。「中務省」は宮中事務全般および式事全般を取り仕切る非常に権威ある役所、のようだが、如何にも形式主義で実権からは遠く見える。しかし、形式こそは国体の魂であり、是を重んじる心を失った国民は流民となる。が、流民の中にこそ血の通った本物の魂がある、という逆説との間で、その限界変化点まで形式は変容し続ける。そして、いつか内からも外からも限界が来て、様式は組織諸共に崩れ去る。ただ、組織は実体がなくなれば実効が無くなるが、様式形式は類例の一つとして用途目的は当

然別物になるだろうが、利用しうる人類の知識財産にはなりそうだ。*「上野親王」の「上野国(かみつけぬくに)」は今の群馬県に当たる地名のようだ。が、此处で言う「くに」は群馬郡に行政官庁の国府が置かれていたという意味で、「上野国」が所管する行政区画は東山道全域という広大さで、東海道の内海勢力たる「上総国(かみつふさぬくに)」と、その北部の鹿島勢力たる「常陸国(ひたちぬくに)」と並んで三大親王任国と封建令制された非常に強い権威性を示す管理領域の一つだ。恐らくは、大和勢力にとって、その取り込みは国体形成に決定的な意義を持つ経緯だったので、平安期には飛鳥期当初の厳しい社会情勢も納まって、大きな政治区分として、また「国」と「宮」の双方に取っての権威付けも兼ねて、親王の食い扶持の名目として与えられた名誉国主の地位が、常陸宮であり、上総太守であり、この上野親王だったのである。今から見れば、受領の台頭という実利事情とは反対の古い力学による政治人事、ではあるのかもしれないが、当時としては正に実情に即した処遇施策だったのであるかもしれない。

と奏す(と、侍従はお知らせ申し上げます)。

「中納言朝臣こなたへ(中納言を)」と仰せ言ありて参りたまへり(と帝の仰せによって薫君が参上なさいました)。

げに、かく取り分きて召し出づるもかひありて(なるほど、このように帝が特に呼び出しなさるだけのことはあって)、遠くより薫れる匂ひよりはじめ(薫中納言は遠くから香ってくる匂いを初めとして)、人に異なるさましたまへり(格別優れた姿でいらっしやいました)。

「今日の時雨、常よりことにのどかなるを(今日の時雨は何時に増して人の出入りも無くて静かだが)、*遊びなどすさまじき方にて、いとつれづれなるを(この藤壺の間は喪中に付き音楽などは相応しく無い部屋だから、実に手持ち無沙汰なので)、いたづらに日を送る戯れにて(どうせ暇潰しするなら)、これなむよかるべき(是が良いだろう)」*「遊びなどすさまじき方にて」は注に<ここは女二宮のいる藤壺の居所。服喪中なので音楽の遊びが遠慮される、という意。>とある。単に、そういう気分の日じゃない、とも読めそうな気もするが、確かに「方にて」の語感には<此处の場所柄>があるようにも思えるし、その事で帝は女二の宮を薫君に意識させようとした、と読む方が面白そうなので従う。

とて(と言って帝は)、碁盤召し出でて(碁盤を用意させ為さって)、御碁の敵に召し寄す(中納言に相手をさせなさいます)。いつもかやうに、気近くならしまつはしたまふにならひにたれば(帝は常にこのように中納言を近くに親しく取り巻きさせ馴れていらっしやったので)、「さにこそは(いつものことだ)」と思ふに(と薫君は思ったが)、

「*好き賭物はありぬべけれど(適当な賞品が無いでもないが)、軽々しくはえ渡すまじきを(簡単には渡せないから)、*何をかは(どういう手を打ったものか)」*「好き賭物」は「よきのりもの」と読みがある。姫宮を勝ったら褒美に遣ろう、という含みらしいが、薫君には分からない、という設定らしい。が、「遊びなどすさまじき方にて」の前振りに気付けば、この「賭物」が<姫宮>だということは察しが着く。が、そうと分かって碁を打つことは中納言の本意では無いようなので、分からない振りをして相手を務める、ということになるのだろう。そういう薫君の心理を帝も察している、みたいな場面だろうか。*「何をかは」は<何としても負けられない>であり、負けたとしても<くさて、その賞品をどうしたものか>であり、つまりは<くさて、勝つには一体どういう手を打ったものか>だ。

などのたまはする御けしき(などと仰る帝の御様子を)、いかが見ゆらむ(どう思ったか)、いど心づかひしてさぶらひたまふ(薫中納言はいつになく緊張して相手を務めなさいます)。

さて、打たせたまふに(そのように碁をお打ちになって)、三番に数一つ負けさせたまひぬ(帝は三番勝負で一つ負け越しなさいました)。

「ねたきわざかな(悔しいものだ)」とて、「まづ、今日は、*この花一枝許す(一先ず今日のところは勝負の印しに、趣きの増した庭の菊の花枝を一本取らせよう)」 *「この花一枝許す」は注にく帝の詞。『完訳』は「いずれ女宮を許すが、まず今日のところは、の気持」と注す。『花鳥余情』は「聞き得たり園の中に花の艶を養ふことを、君に請ふ一枝の春を折らむことを許せ」(和漢朗詠集、恋、紀齊名)を指摘。>とある。出典参照には、原文は「聞得園中花養艶、請君許折一枝春。」とある。引かれた漢詩部分は七言二句なので、「恋」の御題で何人かが連歌したものなのかと思ったが、ヤフー百科によると和漢朗詠集の漢詩は部分抜粋の名言集だったらしい。何だか良く分からないが、いずれ和漢朗詠集に深入りする心算は無いので、この詩文の字面だけを追う。と、「一枝春」とは違って、此処の季節は初冬だが、当文の言い回しにおいても「花」が女の「艶を養ふ」という意味合いは踏んでいるようだ。となると、段頭の「花の色も夕映えしたる」は姫宮の<お年頃>を喩えていたことになりそう。それにしても、「まづ今日はこの花一枝許す」という短い言葉から、紀齊名(きのただな、957~999)の「請君許折一枝春(しょうくんきよせついつししゅん)」の一節を共通認識できるという当時の読者層の教養は、深いのか狭いのか、とにかく私は遠く及ばない。

とのたまはすれば(と帝が仰ると)、御いらへ聞こえさせで(中納言はその御言葉にはお応え申し上げずに)、下りておもしろき枝を折りて参りたまへり(庭先に下りて美しい菊の花の枝を折って持って参りなさいました)。

「世の常の垣根に匂ふ花ならば、心のままに折りて見ましを」(和歌 49-01)

「野菊なら 気楽に折って みますけど」(意識 49-01)

*注にく薫から帝への贈歌。「一ば一ましを」反実仮想の構文。高貴さゆえに遠慮してみせる。>とある。「世の常の」は「垣根」に掛かって、此処は御所の藤壺なので恐れ多くて枝は折れない、と遠慮したのではナイ。薫君は枝を折っているのだから、「世の常の」は「(垣根に匂ふ)花」に掛かって、本当の花の枝ならこんなふう気楽に手折れるが別の賭物は恐れ多い、と言ってこれ以上の賞品はいらないと断わって見せている。が、その枝は帝が<花養艶>と意味付けしたもので、それを踏まえれば中納言は明らかに藤壺姫宮との縁談に遠慮を示している。

と奏したまへる(と奏上なさいます)、用意あさからず見ゆ(傷心の薫君は縁談の予防線を張るのに、用意周到に見えます)。

「霜にあへず枯れにし園の菊なれど、残りの色はあせずもあるかな」(和歌 49-02)

「あいにくと 枯れた園にも 残る菊」(意識 49-02)

*注に<帝の返歌。「園の菊」を故藤壺女御に、「残りの色」を女二宮によそえる。>とある。中納言が乗り気でないのを承知しながらも、それでも水を向ける天皇。何だか本当に畏れ多い気もするが、それくらいだから皇も興に乗る、というところかもしれない。押せば引くし、引けば追う、というのは興味を持つ者の心理だ。

とのたまはず(と帝は仰います)。

かやうに、折々ほのめかさせたまふ御けしきを(このように時々姫宮との縁談を仄めかしなせる帝の御内意を)、*人伝てならず承りながら(畏くも直に承りながら)、例の心の癖なれば(中納言はいつもの厭世観の所為で)、*急がしくしもおぼえず(皇女との縁談というのに全く動揺なくソワソワと浮き足立つことはありません)。*「人伝てならず」は<直に>だが、帝のお言葉であれば、直接は<畏れ多い>のだろう。*「いそがし」は<気忙しい→落ち着かない→動揺する>。「しも」は下に打消しを伴って<少しも～しない>。

「いでや、本意にもあらず(いや結婚は私の本意ではない)。*さまざまにいとほしき人びとの御ことどもをも(様々に気懸かりだった女たちとの御縁談を)、よく聞き過ぐしつつ年経ぬるを(どうにか遣り過ごして何年も暮らして来たものを)、今さらに(今さら藤壺姫宮と結婚したのでは)聖のもの、世に帰り出でむ心地すべきこと(世捨て人が還俗したような気分になる)」*「さまざまにいとほしき人びとの御ことども」は注に<『完訳』は「こちらが放置しては気の毒になる女たち。大君からは中の君を、夕霧からは六の君を勧められたが、うまく実をかわしてきた。ただし、六の君の縁談をことわったのは、年立上、翌年の春」と注す。>とある。「御」とあるから正妻として迎えるべき高貴な身分の結婚相手、に限っての縁談のことらしい。

と思ふも(と思ひながらも)、かつはあやしや(一方では変なことに)、「ことさらに心を尽くす人だにこそあなれ(特に気になる女だったら、また別だが)」とは思ひながら(とは考えてもいて)、「*后腹におはせばしも(中宮腹の女一の宮ならまだしも)」とおぼゆる心の内ぞ(という気になる心の内というものは)、あまり*おほけなかりける(皇女の選り好みという、あまりの不遜さなのでした)。*「きさいばら」は中宮腹の女一の宮。中宮は薫君の姉君だが、薫君が光君の実の子では無いので、実は血縁は無い。薫君は、匂宮からも女一の宮が美形だと聞かされていたのかも知れず、同じ六条院育ちで物心付いたときから気懸かりだったような記事もあり、以前から漠然とした憧れもあったにせよ、それとは別に、女一の宮を通じてどこかで光君に繋がって救われたい、という切実な願いもあったような気もする。*「おほけなし」は大辞林に<身分・年齢・能力を超えているさまである。身のほど知らずだ。おそれ多い。だいそれている。>とある。しかし、薫君の家系と身分であれば、女一の宮も決して<高望み>でもないだろう。むしろ、同族ゆえに避けられる事はあるかも知れないが、それでも<とんでもない縁談>とまでは言わないのではないか。此処でいう<畏れ多さ>とは、臣下身分の者が皇女を選り好みすること自体への<不遜さ>かと思う。

[第五段 夕霧、匂宮を六の君の婿にと願う]

かかることを、右の大殿ほの聞きたまひて(このようなことがあることを右大臣の源氏殿が仄かにお聞きになって)、

「六の君は、さりとともこの君にこそは(六姫はとにかく薫君にこそ似合いだろう)。しぶしぶなりとも、まめやかに恨み寄らば(今はしぶしぶでも、根気良く口説けば)、つひには、えいなび果てじ(最後は断われ切れまい)」

と思しつるを(とお思いだったが)、「思ひの外のこと出で来ぬべかなり(帝が薫君を婿に御考えとは、意外な話が出て来たようだ)」と、ねたく思されければ(と不快に思われなさったので)、兵部卿宮はた、わざとにはあらねど(兵部卿宮の方はと言えば、特に熱心というわけではないが)、折々につけつつ、をかしきさまに聞こえたまふことなど絶えざりければ(時節の折々には、趣向ある御手紙を六姫に差し上げなさはることは絶えていなかったの)、

「さはれ(ともかく)、*なほざりの好きにはありとも(通り一遍の好意で続いている御手紙ではあっても)、*さるべきにて(結婚する宿縁にあるなら)、*御心とまるやうもなどかなからむ(六姫が匂宮の御心に留まる事がどうして無いものか)。*水漏るまじく思ひ定めむとても(情愛が他の女に洩れ出ないような安心できる男を抜かりなく婿に決めようと思っても)、*なほなほしき際に下らむはた(わが弟とは言え、普通の臣下身分の中納言に下るとするのは、また)、いと人悪ろく、飽かぬ心地すべし(とても体裁が悪く、惜しまれることだろう)」 *「なほざり」は<通り一遍。熱心でないさま。>とあり、上文の「わざとにはあらねど」に呼応しているのだろう。 *「さるべきにて」は<結婚する宿縁なので>という定型句のように使われる事が多いが、此处ではこの条件項を受ける述辞が「などかなからむ」という推量なので、この「にて」は仮定構文の<～にあるとして=～にあるなら>という文意になる、ようだ。 *「みこころ」は匂宮の<御気持ち>らしい。実はこの語を頼りに何とか文意が得られたほどで、此处の文は全体に見慣れない言い回しがいつもながらの省語と相俟って、私には非常な難文だ。 *「水漏るまじく」は<水も洩らさぬ抜かりなさで>と<水心が他へ洩れない安心な男を>の掛詞、らしい。「思ひ定めむ」の主語は源氏殿自身。 *「なほなほしき際に」は兵部卿宮に対して<普通の臣下身分=薫中納言>のことなのだろう。

など思しなりにたり(などお思いになるようになったのです)。

「女子うしろめたげなる世の末にて(女の子の将来が心配な不安定なこの末世にあつては)、帝だに婿求めたまふ世に(帝までが良い婿を探し求めなさろうという事情に)、まして、ただ人の盛り過ぎむもあいなし(いっそう臣下身分の娘が盛りを過ぎることになるのでは困る)」

など(など源氏殿は)、誹らはしげにのたまひて(帝を非難がましくまで仰って)、中宮をもまめやかに恨み申したまふこと、たび重なれば(中宮をも事情を知っているはずなのにと事細かく不平を申しなさはること度重なれば)、聞こし召しわづらひて(中宮はお聞きになって困って)、

「いとほしく(心苦しくも)、かく*おほなおほな思ひ心ざして年経たまひぬるを(右大臣がこのように折角大事にあなたと六姫の婚儀を思い気に掛けて何年も経っているのを)、あやにくに逃れきこえたまはむも(あなたが変に避け申しなさはるというのも)、情けなきやうならむ(嘆かわしいことです)。 *「おほなおほな」は大辞泉にも<語源未詳>とあり、分かり難い語だ。それでも用例からして、「大し」の語幹に状態の格助詞「な」が付いた語意では<大事に、大層に>、「凡し」の語幹では<おおよそ、大体>、といった語感のようだ。此处では「大し」の語意で<大事に>ということのようだが、この語用での語感からは、中宮の兄大臣への尊敬が感じられるので<折角大事に>と読んで置く。

親王たちは、御後見からこそ、*ともかくもあれ(親王というものは外戚の後ろ盾があつてこそ何かと身が立つのですから、右大臣のような有力者を疎かにしてはなりません)。主上の、御代も(うへのみよも、父帝の御治世も)末になり行くとのみ思しのたまふめるを(終りが近いとばかりお考えになりおっしゃっているというこの時期だというのに)。 *「ともかくもあれ」の文意は、注に<『集成』は「親王は、ご外戚次第で運も開けるといふものです。夕霧の婿になるのが将来の為と、さとす」と注す。>とある。この係り結びは順接意で、下に<大臣は疎かなり給はず>などが省かれている、のだろう。

ただ人こそ(臣下の者にあつては)、ひと事に定まりぬれば(一人を本妻に決めたら)、また心を分けむことも難げなめれ(他の女を別に本妻に遇することは経済的に出来ないようです)。それだに(そうだというのに)、かの大臣のまめだちながら(この大臣は律儀にも)、*こなたかなた羨みなくもてなしてものしたまはずやはある(この夏の町の一条宮と藤原三条殿とを公平に処遇していらっしゃるのです)。まして、これは(ましてあなたは)、*思ひおきてきこゆることも叶はば(私が願い申している立坊が適えば)、あまたもさぶらはむになどかあらむ(何人も女を侍らせても何も問題はないのですから)」 *「こなたかなたうらやみなく」は注に<雲居雁と落葉宮をさす。>とある。「羨みなく」は<偏りなく=公平に>だろうか。此処の文意は、だからあなたも大臣を見習って、だろうか。いやに分かり難い。 *「思ひおきてきこゆることも叶はば」は注に<立坊をさす。>とある。一の宮の即位と同時に、三の宮の立坊を狙う、というのは強欲ではないのか。尤も、朱雀院の御子の帝と六条院女の中宮であつてみれば、分派勢力は次世代以降に対立するようになるのかもしれない。

など、例ならず言続けて(などといつになく言葉を続けて)、あるべかしく聞こえさせたまふを(あるべき教訓を匂宮に申し聞かせなさんと)、わが御心にも、もとよりもて離れて、はた、思さぬことなれば(匂宮はご自身でも、六姫をもともと遠ざけては、またお思いでなかったことなので)、あながちには(無闇には)、などてかはあるまじきさまにも聞こえさせたまはむ(どうしてこの縁談を考えられないとお断り申しなさいましょうか)。

ただ(ただ匂宮は)、いとことうるはしげなるあたりにとり籠められて(あまりに壮麗な六条院に閉じ込められて)、心やすくならひたまへるありさまの所狭からむことを(気ままに暮らし馴れていらっしゃった今までの二条院生活が堅苦しくなるのを)、なま苦しく思すに(何となく嫌気なさっていたのだが)、

「もの憂きなれど(気乗りしないが)、げに、この大臣に、あまり怨ぜられ果てむもあいなからむ(確かに源大臣にあまり怨まれてしまうのも不都合だ)」

など、やうやう思し弱りにたるべし(などと漸く我を引きなさったようです)。あだなる御心なれば(しかし匂宮は浮気性でいらっしゃるので)、*かの按察使大納言の、紅梅の御方をも、なほ思し絶えず(予てから興味ある藤原大納言家の紅梅の姫をも今だに思い切りなさらず)、花紅葉につけてものたまひわたりつつ(春の花や秋の紅葉に言寄せて歌を贈りなさっては)、いづれをもゆかしくは思しけり(どちらの姫にも恋心を抱いていらっしゃいました)。 *「かのあぜちだいなごんのこうばいのおおんかた」は注に<故柏木の弟紅梅大納言の娘、実は螢兵部卿と真木柱との娘であつたが、兵部卿宮の死後、真木柱が按察大納言と再婚したために継子となっている。>とある。真木柱の連れ子で、実父を藤原大納言ではなく前の兵部卿宮とする東姫のことらしいが、この藤原姫を「紅梅の御方」と呼称するには、紅梅巻二章で

の経緯を踏まえる事が必須で、それは即ち、この宿木巻に先立って紅梅巻が書かれていなければならないことを示すので、紅梅巻が当巻に先立つ巻序となることは、物語内容の時系列からも語り口からも、此処に証明された。また、物語内容を時系列で見れば、紅梅巻は椎本巻と総角巻の間に当たり、語り口からすれば、また是は時系列にも沿うが、椎本巻五章三段と四段の間(より正確には三段の「その年三条宮焼けて入道宮も六条院に移ろひたまひ」の前、とは即ち、「その年」からを総角巻と見做す)に紅梅巻が語られるべきであり、私見では左様に(ということは、写本段階での錯誤を疑って)巻序を見立てたい。

されど、*その年は変はりぬ(しかし、そのまま進展も無いままに新年が明けました)。 *「その年は変はりぬ」の「その年」は早蕨巻の頭に戻るのか。それとも、当巻冒頭の「そのころ」を早蕨巻末と見て、この「その年」は対の御方が二条院に移り住んだ翌年と見るのか。私は冒頭の「そのころ」を早蕨巻と同年と見て、此処まで読んで来たが、破綻は無かったかと思う。むしろ、冒頭の「そのころ」を早蕨巻の前年とすると、此処に記された晩秋ないし初冬の碁打ちの場面(四段)は、宇治姉君の末期(総角巻五章、六章)に当たる時期であり、特に四段末の「后腹におはせばしも、とおぼゆる心の内ぞ、あまりおほけなかりける」という語り口には非常に違和感を覚える。だから、私如きが畏れ多くも、断定とまでは言い切れないが、この「その年」は早蕨巻の翌年と見るのが妥当だ。ということは、以下の語りは宇治妹君が二条院入りして二年目の話になる、と読んで行く。即ち、薫君 26 歳、匂宮 27 歳、対の御方 26 歳、女二の宮 15 歳、といったあたり。